

報告

第3回ジョイント連続セミナーの報告(令和元年度)

牧野典子^{1,2)}

¹⁾中部大学生命健康科学部保健看護学科 ²⁾生命健康科学研究所保健看護領域部門

1. はじめに

生命健康科学研究所保健看護領域部門では、大学院生、教員、学部学生、地域の看護職、医療職などを対象に研究力の向上をめざして、一昨年度よりジョイント連続セミナーを開催している。平成 29 年度は「看護と研究倫理」と題して、看護職向けの研究倫理に関するセミナーを開催し、平成 30 年度は「看護現場の疑問こそ真の看護研究の仮説への道」と題して、研究とは何かを改めて問い直し看護研究の本質について学ぶ機会を設けた。

今年度のセミナーは、看護の現場で活躍する看護職が、自分たちの貴重な経験や実践を研究として表現する方法、すなわち患者との生き生きとした看護実践を表現する方法論について学ぶ機会とした。講師は、看護師と患者との関係のなかで看護実践を意味づけていく現象学的看護研究で著名な西村ユミ氏(首都大学東京健康福祉学部看護学科教授)を招聘した。

氏は、1990 年代後半から 2000 年代初頭にかけて、植物状態の患者と看護師との交流の成り立ちについて探求した。その成果は学位論文としてまとめられ、『語りかける身体－看護ケアの現象学』として出版されている(西村, 2001; 2018)。著書には、氏が現象学的方法論に至った経緯が述べられている。例えば自然科学的な方法論は、患者の理解において、病状や症状を理解し説明する測定できる数値だけに頼り、患者を観察した看護者の感じ方や主観的推測を排除してしまう危険性を抱えていた。また、多くの質的看護研究の方法論についても「対象者の側の語りのみをデータとしてその内容をまとめ(中略)、研究者の言葉や関与についても吟味する必要があるのではないかと考え、研究方法を安易に決定することなく探求し続けた。そして、現象学が氏の研究にとって不可欠で有意義な方法論になっていった。

現象学という言葉は、現在、看護研究の一般的な質的研究方法になっているが、かつて多くの看護師にとって

耳慣れないものであった。ただ、現在でも現象学的研究について理解できている看護職は少なく、現象学を説明する言葉自体に難しさを伴っていることもあって、看護学生が調べても理解するまでに至らないのが現実である。

そこで、氏には現象学が自分の研究にとって有意義な方法論になるまでの経緯と、現象学的研究についての理解を深めるお話を中心に講演していただくことをお願いした。

2. セミナーの概要

- 1) 日 程: 令和 2 年 2 月 8 日(土) 14 時～16 時
- 2) 場 所: 中部大学不言実行館 1 階 アクティブホール
- 3) テーマ: 「看護現場の生き生きとした経験を探求するプロセスで出会った現象学の思考」
- 4) 講 師: 首都大学東京健康福祉学部看護学科 教授 西村ユミ氏



講師 西村ユミ氏

- 5) 参加者: 160 名。内、一般参加者 19 名(本学臨地実習施設および近隣の医療福祉施設看護職、大学および専門学校看護教員)、学内教員 34 名、学生 107 名(院生 2 名を含む)。

6) 内 容

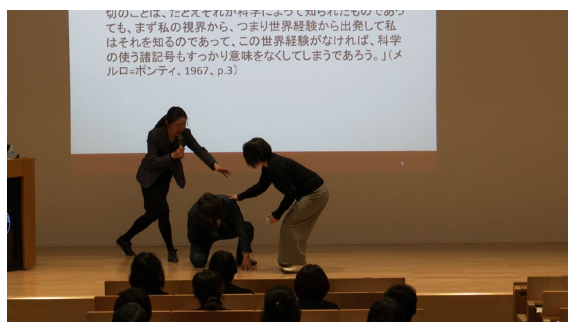
西村氏は『語りかける身体－看護ケアの現象学－』の

具体例やフィールドメモ、スライドの配付資料(2020)を用い、参加者協力によるロールプレイなどを交えて説明を開始した(文中「」内は配付資料の引用文)。

①「現象学的研究とは」

現象学的研究とは、理論的基盤に、近代哲学の一大潮流である現象学を置いている研究のことである。基本的姿勢としては『事象そのものへ』立ち返る」ことが重要で、研究者は、自分に思い込みや先入見があり、事象そのものへ立ち返ることを妨げられていることを自覚する必要がある。思い込みや先入見を自覚しそれらをカッコに入れ、「生活世界に立ち返り、理念の生成を解明する」必要がある。例えば看護師は「植物状態患者が他者と関係をもてるのか否か」という見方、「看護師の知覚が客観的な根拠をもっているか否か」という思考に陥りやすい。現象学的研究を学ぶ西村ゼミでは、研究者の思い込みや先入見を自覚するための訓練を繰り返しているという。必要な訓練期間は、講演後の質問に氏が回答したところによると、「約1年間」とのことである。

さらに、現象学的研究とは、「『生きられた経験』の構造・発生を記述する」研究である。メルロ＝ポンティは「私が身体的存在であるがゆえに、知覚された世界がパースペクティブ性のもとに現れ、つねに私には見えない隠れた側面をもつ。私がはつきり自覚せずに行っている広大な身体的生活が私の意識的な生活を支えてくこと、その意識される手前の生きられた経験の発生を記述する」と説明している。これについてはロールプレイで説明された。



ロールプレイ

西村氏は、メルロ＝ポンティのいう「前意識的次元から問う哲学」を、参加者を舞台上に上げてロールプレイで説明した。男性が「お腹が痛い」としゃがみこんだ時、傍にいた女性は「どうしました?大丈夫ですか?」と手を差し

伸べる。現象学では両者がセットで記述されることが必要で、「意味に満ちた経験の世界を描き出す」ことができる。では、男性のみ、あるいは女性のみを切り離して記述した場合はどうなるであろうか。両者の関係は遮断され、特に女性が差し出した手の意味は記述できない。それは、「意識の志向性(常に何かに向かっている意識)」が描写できないからである。

②「現象学的研究のポイント」

以上のように、例えば「記述的現象学」では、「自然科学的な見方、経験の外側(既存の理論や見方)、先入見等々に対して距離をとり(カッコ入りし)、意味を帯びた『生きられた経験』に立ち返って、この<経験>を解明する」。また「解釈学的現象学」とは「歴史的に形成されているテキストの『先行理解』を修正して(更新させて)いくことによって、テキストを『別様に理解する』ことで、意味理解の構造を解明する」ことである。ゆえに、研究の方法は「探求しようとする<事象>がどのようなものであるかによって、とられる『方法』が異なる。すなわち、『方法』は<事象>そのもののほうが強いてくる」のである。

③「具体的方法」

参加観察と対話式インタビューとがある。参加観察は「調査者がその現場に身を置き、事象の生成自体に関与するとともに、調査者の経験の理解を組み替えていく」方法である。ゴッフマンは参加観察を「・・・あなた自身を、身体とパーソナリティー、そして社会的状況を、一群の人々の上に働いている一連の偶発的条件に委ねることによって、データを獲得する方法です。そうすることで、彼らが社会的状況や仕事の状況や民族的状況等々に対して反応を交わし合う円環の中に、物理的かつ生態学的に侵入することが可能となるのです」と説明している。現場に身を置いても外側から眺めている限り何も得られない。現場で起こっている事象の生成自体に関与し侵入することによってのみ、調査者の経験の理解を組み替えるようなデータを獲得することができると理解した。

対話式インタビューは、「インタビュアー(インタビューする人)とインタビュイー(インタビューされる人)が語りを生成」する方法である。氏は、メルロ＝ポンティの表現を引用して、「対話においては、『他者と私とのあいだに共通の地盤が構成され、私の考えと他者の考えとがただ一

『…相手の唱える異論が私から、自分が抱えていることさえ知らなかったような考えを引き出したりもする』と、一方向のインタビューとは異なることを説明している。

④「現象学的研究の学際的活動への期待」

氏が植物状態の患者と看護師との交流の成り立ちについて探究してから20年後に、「グレーゾーン」という新しい研究領域が、fMRI (functional Magnetic Resonance Imaging) や PET (Positron Emission Tomography) を活用して「植物状態と診断された人の15～20%に意識がある」ことを証明した。氏は(2019)、「他の方法で取組んでいる研究チームに合流することで、現象学的研究が力を発揮できる可能性もある」と述べている。

3. 参加者の反応

セミナー終了後、任意で無記名のアンケート調査を実施した。76名から回答があり回収率は47.5%であった。

1) 参加動機

学部生46名を含めた全体の参加動機は以下の通りで約5割が「テーマ、今後の活用、講師の魅力」であった。

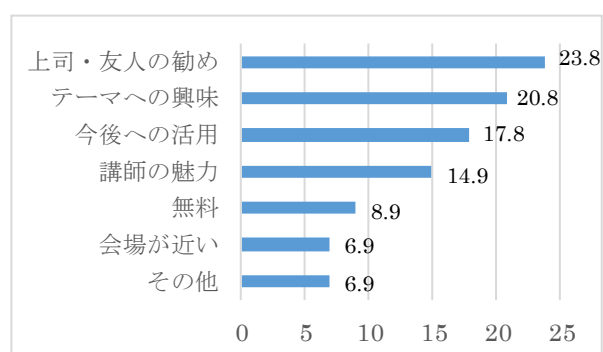


図1. 参加動機 (%)

2) 理解度

学部生と学部生以外の回答者の講演内容の理解度を比較すると、「理解できた」「ほぼ理解できた」学生は34.8%、看護教員や看護職は51.7%であり、3割以上の学生と5割以上の看護教員及び看護職が「ほぼ理解できた感」を得ることができた。氏がロールプレイも導入して丁寧にわかりやすく説明された成果であると考えられる。

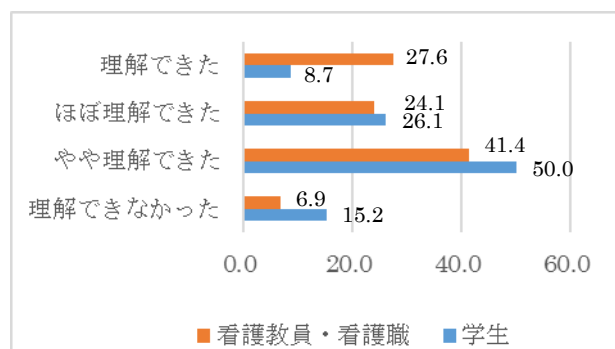


図2. 理解度 (%)

3) 研修内容は今後に役立ちそうか

8割以上の回答者が「大いに」「役に立ちそう」と肯定的である。「あまり」「役立たない」は9名(14.9%)であった。

村上(2019)は、慢性病の人々への看護ケアには「現象学的研究への取り組みが必要で…、それは、従来の糖尿病ケアとは異なる見方、食事療法を継続することの難しさがどこから生じているかが見えてくる見方である」という。また、脊損患者の看護経験から、「患者を知ろうとするのではなく、彼らの視点から、彼らの経験を理解したい」という態度こそ看護ケアに必要な見方であると説き、現象学的研究の取り組みの必要性を述べている。参加者の今後の取り組みに期待する。

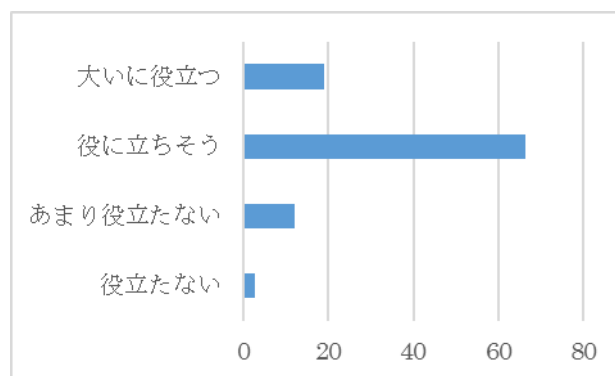


図3. 役立ちそうか (%)

4) 自由記述

- ・もう少し聞きたかった。
- ・貴重な機会をいただきありがとうございました。
- ・現象学での日々の看護活動を振り返ることは面白いと思いました。
- ・現象学は難しいイメージでしたが、先生の講演を聞き、非常に理解が深まったと思います。ぜひ著書を読んでみようと思いました。

- ・西村先生の探究心に感銘しました。現象学は難しいですが、2つの世界の繋ぐものをそのまま取り上げる思考だと理解しました。またどこかで教えていただきたいと思いました。
- ・たいへん楽しい御講義ありがとうございました。難しい内容だったのかもしれませんが、先生の笑顔でとてもよく理解できてくるように思いました。

4. おわりに

西村ユミ氏は、1990年後半から現象学的研究に取り組み2000年に学位を取得したが、その間には先駆的な研究方法であるからこそのご苦勞をされたと聞く。今でも質的研究に対する批判はあるが、20年前は厳しい時代であっただろうと思う。氏は、当時のご苦勞を笑顔とユーモアを交えて話された。今回の講演でも、現象学的研究という一見難しい内容を、笑顔とユーモアで学部学生にもわかりやすく説明された。その結果、多くの参加者の満足感を得ることができたと考える。心から感謝したい。

最後に、ご参加いただきました皆様、運営に際しご尽力いただきましたコモンズセンター、教育支援課、看護実習センター関係者の皆様に厚く御礼申し上げます。

引用文献

- 西村ユミ(2018):語りかける身体―看護ケアの現象学, 講談社.
- 西村ユミ(2019):現象学的研究における「根幹」と未来, 看護研究, 52(7), pp521-529.
- 村上優子・西村ユミ(2019):現象学的看護研究の導入と新たな展開, 看護研究, 52(7), pp530-535.
- 西村ユミ(2020):中部大学生命健康科学研究所ジョイントセミナー配付資料

講師紹介

西村ユミ氏

略歴:2000年日本赤十字看護大学大学院看護学研究科博士後期課程修了し博士(看護学)を取得。2000年～日本赤十字看護大学講師、2003年～静岡県立大学看護学部准教授、2006年～大阪大学コミュニケーションデザイン・センター准教授を経て、2012年より現職。

社会活動:2015年臨床実践の現象学会設立、第1回大会長

著書:看護師たちの現象学(青土社, 2014年)、看護実践の語り―言葉にならない営みを言葉にする(新曜社, 2016年)、遺伝学の知識と病の語り―遺伝性疾患をこえて生きる(新曜社, 2018年)、語りかける身体―看護ケアの現象学(ゆみる出版, 2001年;講談社学術文庫, 2018年)、看護の経験を意味づける―対話をめぐる現象学(日本看護協会出版会, 2018年)他

企画・運営

2019年度生命健康科学研究所の助成を受けた。

[企画委員]

牧野典子, 三上れつ, 堀井直子, 渋谷美穂子, 久米和興, 城憲秀, 梅本充子, 白石和子, 山田知子

[運営委員]

江尻晴美, 三輪美紀, 荒川尚子, 緒形明美, 松田麗子, 滝沢美世志, 森幸弘, 堀田清司, 大屋富彦, 齋藤有美, 佐川沙紀

Title: Report of the third Joint Seminar of the Division of Nursing 2019

Author(s): Tsuneko Makino^{1, 2)}

Address(es): ¹⁾ Department of Nursing, College of Life and Health Sciences, and ²⁾ Institute of Life and Health Sciences, Chubu University, 1200 Matsumoto-cho, Kasugai, Aichi 487-8501, Japan

Keywords: Nursing research, Phenomenological methodology, Research methodology